



逆説的感情論

ぎゃくせつてきかんじょうろん

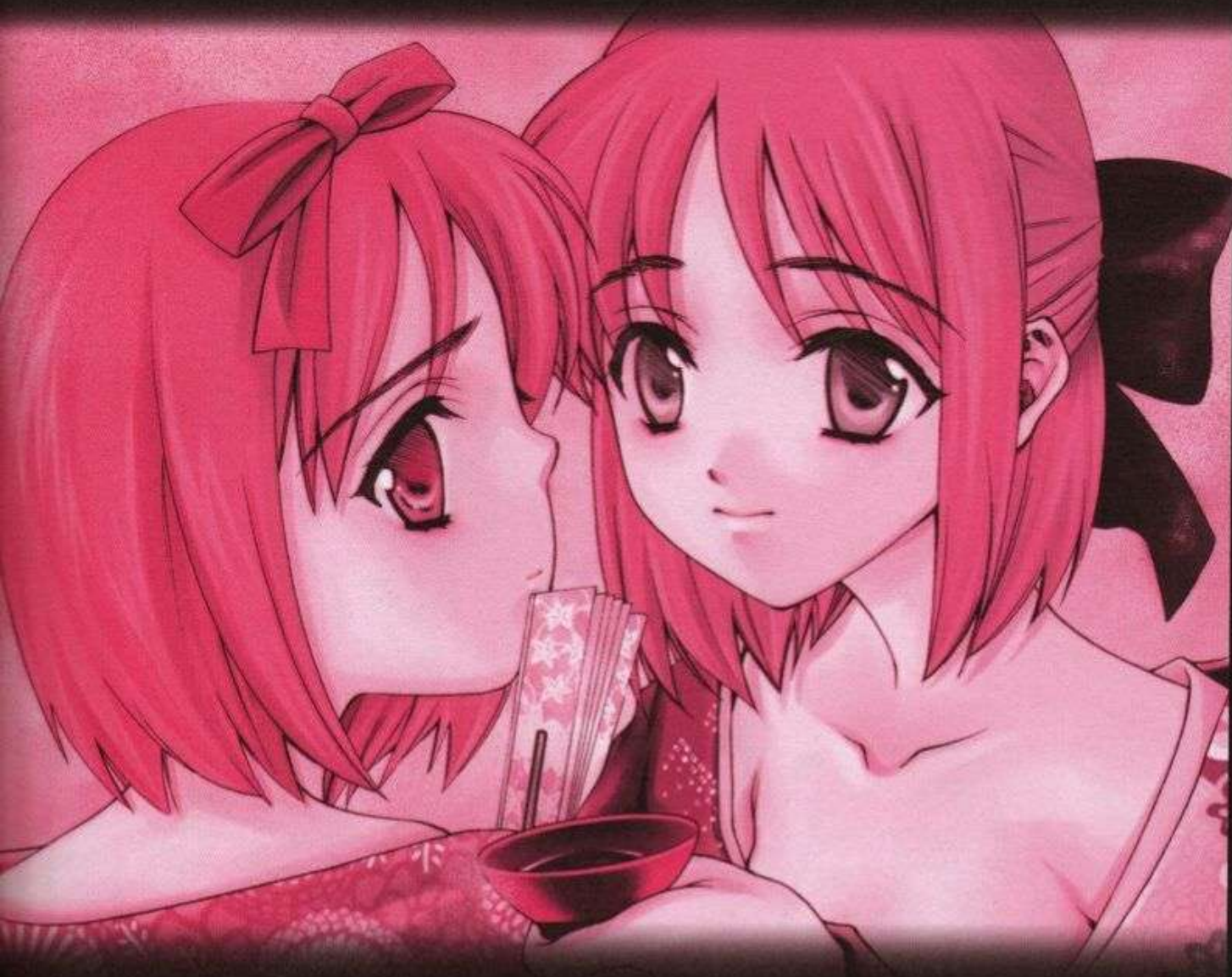
成年

Ren-Ai Mangaka Presents

逆說的感情論

戀愛漫画家





逆説的感情論

05～26 鳴瀬ひろふみ

28 ALPINE

29～30 月吉ヒロキ

31～34 息吹ポン

35～38 久我城貴哉



Hirofumi Naruse Presents



The small dreamer who looks at a dream.

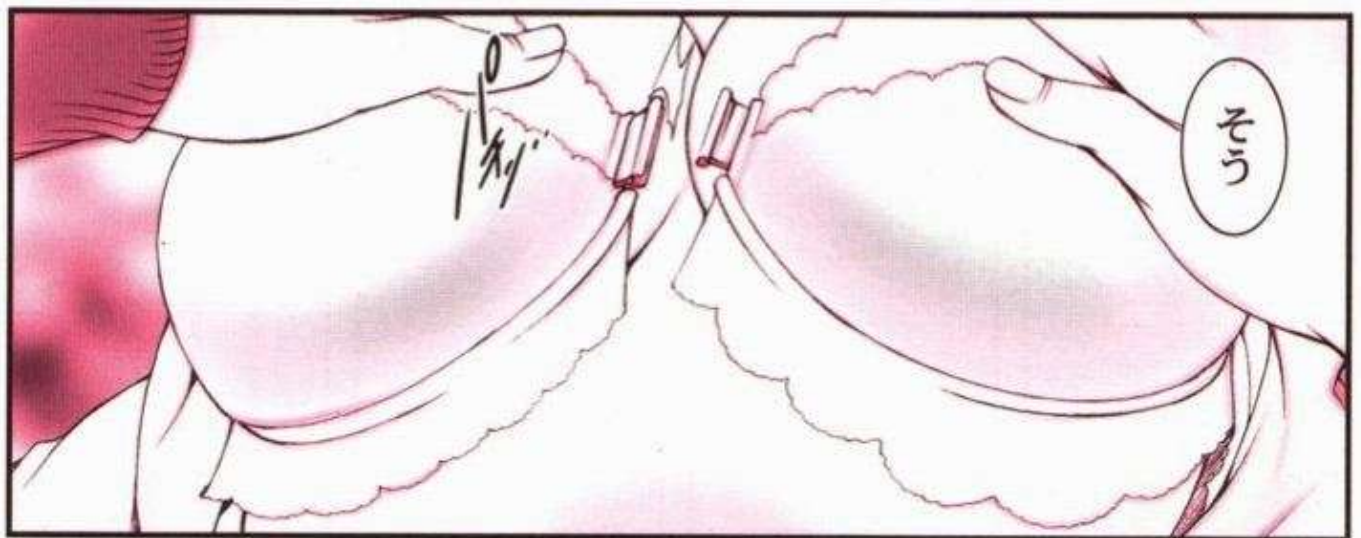
She is having a longing.

Wanted to be together with a sweetheart.



逆説の感情論







ふ...あ...

ああ...

胸
気持ちいい？



うん



志貴
キス

もじと...



い…

一杯
いじったじゃ
ない…



…すごく濡れてる

アルクエイド…

キスで
こんなに
濡らしちゃうんだね

ぬち…



触る前から
濡れてたよ



い…









「んんん」

「んんん」

「んんん」

repeat again...

論感情的逆說

そう

繰り返す日常



そして 感じる視線



そうだろうか？



そうだ これは…



どうして忘れていた？



前にも
こんな事が
あったじゃないか

こんな
不自然な世界
現実じゃ
ありえない



アイン



何か理由が
あるんだろう？



レン
どうして…

そんな顔
しないで
怒って
ないから



え

デートが
したかった?
俺と?



自分とじゃ
俺が楽しいくない
かもって?

アルクエイドと
いるときの俺が
楽しそうだったから?



あれじゃ
あの夢は
おかしいだらう?

何で
アルクエイドと
恋人同士って事に
なってたんだ?



楽しそうに
デートして
いるの

見ているだけで
よかった

恋人達の世界は
とても楽しくて

羨ましくて

でも



本当に楽しく
なりたいなら
それじゃ
ダメだよ

こうやって
直接触れないと
『本当』は
感じられないよ



え
なになに？



ん
リップ

塗って
欲しい？

こういうのに
憧れるって
かわいいな

女の子だね

まじで...

都古ちゃんも
遊んで

オバケのようになつてたっけ...



かわいいよ
レン

恋人みたいに
して欲しい？

.....
そっか







あー
分かった
分かった

ごめん
レン
『恋人同士』
だったね



え？
入れないのか
って？

だめだよ
レン
痛いだろう？



だめだよ
レン
痛いだろう？



?...
?

中に?

分かった



恋人同士
か…



二人で
出かけよう

…よし
明日
デート
しよう



何が
起こるか
分からなくてさ

本当の
デートは
楽しいよ



こういう
デートも
良いと思うよ

俺は
楽しいけど...



そう
不服そうな顔
するなって

レン



公園行こう

琥珀さんが
お弁当作って
くれたしさ



現実

大人に憧れる少女の気持ち
って、すごく可愛いなあ
と思うんですよ。

そんなお話。

逆説的感情論





100円



…じゃあ

逆に
兄さんが見ている夢を
見ることも出来るの？



ねえ、
あなた確か

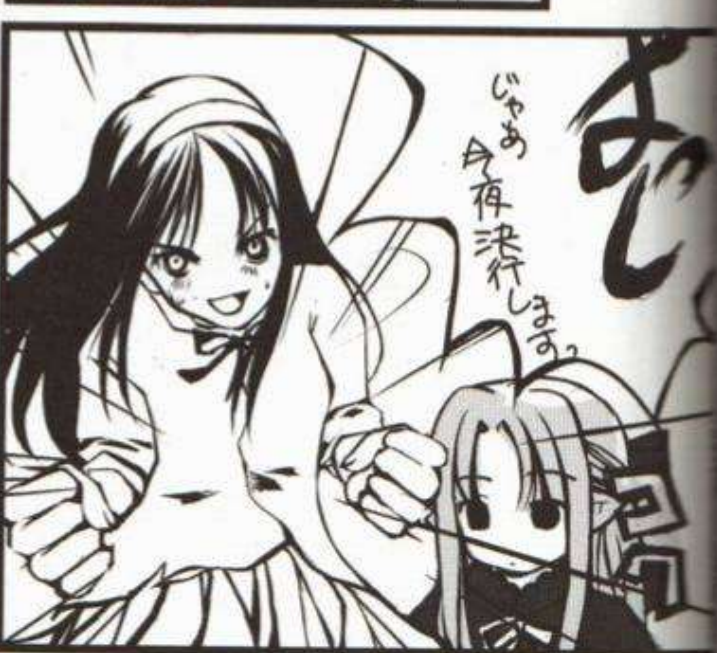
他人に夢を
見せられる
…のよね？



と、
夜。

あんなに
さななこさん
いっしょに
いっしょに

あんなに



いっしょ
に決行します

あ



…ごめから
今日だけは
遠野先輩とは…

—そうか。
そこまで言うのなら
仕方がない
……うん、仕方がない

アキくん、アキラちゃん
その…言いくいんだけど
さっきから秋葉の奴が…

ゴゴゴ

えっ?

と、この先輩つづ
これは、その……
ちみこした出来心…

…まあ、そういう事も含めて
ゆるゆくりと話を聞いて
差し上げます

あら、あなたの出来心
と言うのは随分と
容易周到なのね…?

いざずずずずず…

南無…

ま、まあ秋葉の事だから
アキラちゃんに
どうこうする事は
ないと…思うけど
……多分

■「『月姫・歌月十夜』とっても勝手なサイドストーリー」■
反転女子高生と背徳の行為に身を染めた少女！魅惑の個人レッスン（某書籍風）…嘘です。 作・息吹・ポン



「ええ。 兄さん近づく人間は
邪魔なだけ……」

「せ…先輩？ 何するんですか？」
「別に…特に何をやる訳ではないわよ？」

「ただ…邪魔なだけかな？」
「じゃ……邪魔？」



「せ…先輩、それってどういう…」
「言葉通りの意味よ」



「わからないかしら
私が好きなのは
兄さんだけ……」

「ま……まさか……？」
「ええ、だから貴方みたいに
兄さんに近づく人間は……」

「……でもね」

「貴方は特別。」

「……貴方だけは……
可愛がつてあげる……」
「や……っ……せんぱ……」
「ふふ……遠慮はしなくて良いわよっ」

「駄目……ですっ……先輩……」
「ほら……こんなに濡れてる」
「ちが……っ……」
「あれ？ 嘘は良くないわよ？」

「せ、先輩……」
「なに？ 瀬尾」
「何だか変な感じ……が……」

「あら、瀬尾は初めて？
……そうよね……だったら」
「せんぱ……やっ！」
「……たっぷり教えてあげる……」
「……ッ！」

「ホラ……力を抜いて……」
「やだ……っ……なに……っか、が……」
「んああああああ……っ」
「せん……ぱ……い……」



あ、秋葉？
何でここに...

言い忘れたことがあったから
戻ってきただけです！
それなのに...

なんですか、
この妄想マンガはあ！
私がこんな
キャラのはず...

あ、あのなあ...
一応「お約束」
なんだからこう...

兄さんっ！

...はい

ちぎ、がつわい。



えんど...分かりにくいオチでスミマセン...

羽が舞い上がる

「ちよつと羽居、人の机の上に荷物置かないでっついても言ってるでしょう。いらぬのなら捨てるわよ」

ため息混じりに毎日のお決まりのお小言。

「えー、その裏七つ道具は捨てちゃ駄目だよー。なかなか手に入りにくいのが多いんだからー」

そう言いながら袋を取る羽ピン。

「……はて。」

「なに、その『裏七つ道具』って。初耳なんだけど」

「……なに、その『……あ』って」

「『あ』、は『あ』だよー。それじゃあわたし用事があるからー」

何事もなかったかのように振るまい出て行こうとする彼女の襟首を掴んで引き止める。

「くあ、首が締まるー。秋葉ちゃんの人殺しー」

「ねえ、羽居。あなた、一体何を隠してるの？」

「違うよ、隠したりなんかしてないよー」

「何が違うのかは知らないけど。言わないのならこちらにも考えがあるわよ？」

気持ち強めに睨んでみる。

「う、だつてだつて、みんなに怒られちゃうしー」

「みんなって？ 誰が関わっていてそれは何なのかちゃんと言いなさい」

「うーうー、じたばたじたばた」

暴れる羽ピンを取り押さえようとしていると、もう一人のルームメイトが帰ってきた。

「何バタバタとやってるんだ、外まで聞こえてるぞ」

「あ、たすけて着ちゃん。秋葉ちゃんがいじめてるのー」

「蒼香、ちよつと羽居を捕まえてよ。何やら挙動不審なの」

「全く、羽居はともかく遠野までが何をやってるんだ。つて、ちよつと待て羽居、それは……」

蒼香は羽ピンの持つている袋を見て何やら慌てた風だ。

……おかしい。

「蒼香、あなたそれが何か知ってるわね？」

「たはーつとして額を押えながら、『あれほど気を付けろと……』などとブツブツ言いつつ、どうやら観念した様だ。」

「まあ何だ。羽居のもう一つの仕事用の道具、つて言う事らしいと聞いているが、詳しくは羽居に聞け」

随分遠まわしな言い方だ。往生際が悪い。

「……羽居？ もう一つの仕事って……」

「……いない。しまった、逃げられたか。」

仕方ない。ここにいる被疑者に尋問するしかない様だ。

「ふふ、覚悟なさい。知っている事は洗いざらい喋ってもらわよ、蒼香？」

引き撃った顔で彼女は頷いた。

「まああたしも知ったのは偶然だったんだ。あれは2ヶ月ほど前の事だったかな」

とすると、ちよつと紫の私書箱事件が一段落した頃か。

「ちよつと急ぎの用があつて羽居を探したら、たまたま、その……仕事現場を見てしまった、てな感じなんだが」

「……ねえ蒼香、あなたにしては随分と歯切れの悪い話し方ね。一体何だつていうの？」

「……なあ遠野よ、あたしだつて言いにくい事を話してるんだ、黙って聞いててくれないか」

「そう。そうね、了解。で？」

「ん。その、羽居を探した時、寮長に安藤先輩の所にいるんじゃないかって聞いて、行ってみたんだ。そしたらドアに取り込み中つて札が掛かってたんだが、こつちも急ぎの用だつたからドアをノックして羽居を呼び出した。けど反応がなくて、でも中には人がいる風だつたからドアを開けてみたら開いてたんで、中を覗いてみたら、羽居と安藤先輩が、ベッドの上にいた、つて事だ」

言い終えてコーヒーをすすする蒼香。

「そう。で？」

「で、つて、ただそれだけの事さ」

「それだけつて、それじゃサツパリ訳が分からないじゃない」

「んー、まああと付け加えるなら、二人は裸だった、って事だな

「……は、裸？ ど、どういう事よそれは」

「分からんか？ 二人はお楽しみの中の真つ最中だったって事さ」

「お、お楽しみって何よ……」

「言葉通りさ。まあ、あたしも最初見てすぐは理解不能って感じで思考回路が停止したけどな」

「待て、それは今の私だ。あまりの衝撃的な事実で頭の中が真っ白になってる」

「……で、それが仕事ってどういう事なの？ なんだかとても嫌な予感がするのだけど」

「多分想像通りさ。羽居は依頼を受けてはあの七つ道具で依頼主を慰めてるって訳さ」

「……！ 何よそれ、それじゃまるで……娼婦、みたいじゃない

「まあ、そういう見方も出来るな。男役が多いから厳密には違いかもだが」

「何馬鹿な事言ってるの。全く、羽居ったら何をしてるのかしら……」

慌てて羽ピンを探しに行こうとした私を、蒼香が制止する。

「待ちな遠野、これは羽居が納得してくでやってる事だ。あたしらが口を挟む事じゃないさ」

「な、なに呑気な事を言ってるのよ。こんなこと止めさせなきゃ……」

「まあ落ち着けって。おまえの気持ちも分かるよ、あたしだって最初はそう思ったんだし」

「……」

「で、安藤先輩の部屋に踏み込もうとした時に、あたしを見た同室の桑田先輩に引き止められたんだ。鍵が開いてたのは桑田先輩がトイレに行ってたからだだったんだ。で、彼女に、落ち着いて話を聞いて中の二人の様子をちゃんと見て欲しいって言われてな

「……どうだったのよ」

「あいつは、羽居は羽居のままだったって事さ。やってることは

兎も角として、あいつは人の役に立って喜んでもらうのがなにより嬉しいって奴だろ」

「それはそうだけど……」

「そりやまあ確かにベッドの上では尋常じゃない事をしてたよ。けど、気持ち良さそう先輩と嬉しそう羽居、二人の表情を見て、何か理解させられた気がしたんだ。やっぱり羽居は羽居だなってね」

「……」

「この事に関して、色々聞き込みを試してみたけど、改めて羽居が色んな意味で最強だなって思い知らされた。愛されてるよ、羽居はみんなに」

「そう……」

何と言うか、まいった。確かに蒼香の言う事は分からないでもない。私だって肌を合わせる事の気持ち良さ、心地よさは知ってるし、相手がいればきつと求めるだろう。そして、その相手とは心の繋がりも深くなる。

けど、やはりこの事は理解出来る範囲外だ。

「頭で考えるからさ。例えば音楽だつて(と)ライブじゃ全くの別物なんだ。だから、そうだな、遠野も羽居としてみれば分かるんじゃないの」

少しからかうような表情でとんでもない事を言う。

いや、ちよつと待て。

「『遠野も』って事は、やっぱりアンタ」

「……まあ、話を聞いている時にちよこつとな。見るだけ、聞くだけよりも自分で体験した方がはるかにその事に対して理解できるだろ。何だつて一緒だよ、生には敵わないさ」

「……そう。そうね、色々聞いた上で、百歩譲って蒼香の言い分は認める。けど、羽居自身はどう思ってるのか、それはちゃんと聞かないと納得できないな」

「わたしがどう思ってるかって？」

「は、羽居？ アンタ、いつのまに……まあいいわ。ちよつと真面目な話をするからね」

「うん。何かなあ」

「その……『裏』のお仕事とか言うのは、あなたは嫌々やらされてるとか、そういう事はないの？」

「……」

「えー、そんな事全然ないよ。みんな気持ち良くなつて喜んでくれるし、わたしも気持ち良くて嬉しいし楽しいよ。みんな優しくしてくれるし」

「そう、なの……」

蒼香の言う通りだ。羽ピンが納得して自分からやっていている事である以上、横からは何も言えない。

そう思ふと彼女を見ると、何時になく真剣な表情で私を見ている。

「ねえ秋葉ちゃん、わたし秋葉ちゃんにも喜んでもらいたい。ダメかな？」

「え。ダメかな、つて言われても……」

「それとも、わたしの事嫌いになつちやつた？ こんな事やつて嫌な子だつて思つちやつたかなあ？」

う、そんなうるうるした目で見られたら……弱いんだよなあ。ふう。結局、羽ピンには勝てないのかも。

「そんな泣きそうな顔しなくても、別に嫌つてなんかないわよ」苦笑混じりに答える。するとパツと喜びの表情に変わる。本当に素直な子だ。

「嬉しいなー、じゃあ早速秋葉ちゃんを気持ち良くしてあげるねー」

「つて、いきなりなのかアンタつて子は！ 私だつて心の準備が……」

「いーのいーの。あー、蒼香ちゃんはそつちねー」

何だかやたらと手際良くベッドに押し倒された。

このまま流されちやつてもいいのかなーと思う間もなく、ほつぺにキスされた。何度も何度も繰り返す。くすぐったくはあるけれど気持ちいいし嬉しいかもしれない。

「秋葉ちゃん、身体、触るね？」

裾から羽ピンの手が入ってくる。とても繊細な触れ方で、お腹から脇腹、そして胸に。

ふに、ふに、と優しく優しく揉み上げられる。時折指で胸の先を転がされると、背筋に電流のような感覚が走る。自分の小さな胸はあまり好きではないが、こんな時は自分が女である事を感じられて何だか嬉しい気がする。けど、この感覚を与えてくれてい

るのが自分の友達だというのは、やはり複雑な気持ちだ。

「ねえ蒼香ちゃん、そつちの胸を可愛がつてあげて」

蒼香と目が合う。優しく微笑みをくれた。

「じゃあ遠野、触るけど、痛かつたりしたら言うんだぞ」

ゆつくりと手が伸びてくる。恐々と胸に触れてくる蒼香が何だか可愛い。

「胸、気持ちいいよ、羽居、蒼香」

その言葉に気を良くしたのか、羽ピンは私の胸を完全にはだけ

させて、チュツと吸い付いてきた。

「あつ……それ、刺激が強いよ……」

羽ピンの絶妙な力加減で、私の下腹部に甘い痺れが走る。

蒼香も見様見真似で舌を這わせてくる。

「蒼香ちゃんはそのまま胸を可愛がつてね。わたしはメインデ

イツシュにうつりまーす」

これまた手際良く、するすると下着が脱がされてしまった。……

……

「は、恥かしいじゃないのよ羽居、変な事しないで」

「変な事じゃないよ。ここが一番大事な所だもん。秋葉ちゃんを

気持ち良くしてあげるのー」

足を持ち上げられ、やたらと恥かしい恰好にさせられる。これ

では……全部が丸見えではないか。

「胸、気持ちいいみたいだねー。段々と濡れてきてる……ん？

んんー？」

何やら難しい顔をする羽ピン。

「な、なに？ 私の、何か変なの？」

「秋葉ちゃん……もう経験しちゃつたんだ？」

それは質問というより確認だった。それはそうだろう、羽ピン

は多くのそこを見てきているのだし、そういう事にはすぐに気が

付くはずだ。

「そうなのか？ じゃあ遠野はすでに兄貴といたしていた訳か。

兄貴も大変だな、長い事お預けを食わされて」

「あーもう二人とも、そんな余計な事はどうでもいいの！」

知られてしまった恥かしさで、気持ち良さが飛んで行ってしま

った。

「あーゴメンね秋葉ちゃん。でもいいな、好きな人と出来るな

んで。羨ましいな」

「いやしかした、兄貴にこういう事をしてるって知られたら、マジだろうな」

「あーそうだねー、シヨックで寝こんじゃうかも」
こ、こいつら……

「アンタ達は鬼か悪魔か！」

「やだなー秋葉ちゃん、わたし達は天使だよー」

「うちは仏教だがな。まあともかく、これからもよろしくな、遠野」

……ああ、私は一時の気の迷いでとんでもない弱みを握られてしまった。

これからどうなってしまうのか？

「大丈夫、これからはもっと楽しくなるよ！」

Fin

何ていうかイッパイイッパイですいません。
でも、歌月十夜でお話を考えてる間
楽しかったです。

もっと描きたい事一杯あったのになあ。

リベンジしたい気も。
…気持ちだけ一杯。

また次の本でお会いしましょう。

鳴瀬ひろふみ 2001. 12



逆說的感情論

発行 / 恋愛漫画家

発行日 / 2001. 12. 30

発行人 / 鳴瀬ひろふみ



逆説的感情論

恋愛漫画家 Presents 成年向